

製造業離れ理工系離れに思う

会計理事 塚田啓一



10年前ある非製造業に勤める私の同級生が言うことには「男性社員の半分以上の年収は1,000万を越える。越えないのは若い人と本社のデスクワークの一部」とのこと。これでは製造業に人気がないのも仕方がないと思った。しかしその業界で1,000万を越えるまで持ちこたえられるのは同期入社の人10人に1人。9人は環境とノルマに耐えられずに退職という仕掛け。これではいくら偏差値が高いからといって理工系を出て入社してみても所詮他人の畑。理工科系ならかなりの人が技術畑に戻っているはず。製造業ではこんな脱落は皆無である。

しかし、なぜこんなに給料が高いのだろう。それは近ごろ気が付いた。規制だったのである。規制に守られた業種だったので。規制にはコレステロールのように良いものと悪いものがあることは知っている。悪い規制は外圧のおかげでどんどんはがされつつあるしそのひずみは臨界点に達している。

我々製造業の生産現場では完全自由化で規制なし、国際価格で競争している。ハイテク品の工場出荷価格は海外にひけを取っていない。だが東京の物価はニューヨークの1.3~5.9倍とのこと。これは規制によって価格競争が阻害された結果生産性の低い部分の体質改善が遅れているためである。体質改善が遅れている官庁、金融、証券、流通はじめ皆様ご存じの分野の改善が進めば相対的に製造業の位置は上がってくることになる。規制にしがみついてもぬくぬくと働き以上の高給をむさぼっているグループは冬の時代を迎えつつあるのである。

本誌8月号の討論会要約にあるように、2005年には40万人の研究者不足が予測されている。需要供給で価格が決まるのは自然の理、この面から見ると理工系は先太りと若い人には予想できないのだろうか。といって給料で釣られて数が水ぶくれでは困る。入ってきて脱落することになる。質が問題。

質を上げるに今からどうする。大学だろうか。大学では手遅れと思う。技術の好きな子供をたくさん育てることが不可欠、もっと技術の素晴らしさを小学校で、中学校で先生が、また家庭では両親が語ってほしい。向井さんの熱が冷めれば元に戻ってしまうのでは情けない。私がここ10年聞いた話、例えば本四架橋、光通信、4分ごとに発車する東海道新幹線、リアモーターカー、もっとたくさんあるに違いない。ロマンの塊である。

今から50年前まで子供は軍人になることがロマンであった。あれほどエキセントリックでは困るが、資源のない日本、技術立国しかありえない。自然科学の素晴らしさ、工学の巧みさをもっと宣伝する必要がある。